

やまがら

2020年以降、全世界を震撼させパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス（COVID-19）は、2022年頃になってようやく落ち着きをみせはじめ、2023年5月に5類感染症に移行して、移動等の制限が緩和された。それによってようやく私たちも出張・調査等で山村を訪れることが、再び可能となった。

2023年から、関東、東海、中国、そして九州地方の山村を何度か訪れてみて、新型コロナウイルスの影響（あったのか、なかったのか？）をいろいろ見聞きしてみた。

そこで聞かれたことの多くは、どの地域でも“それほど影響はなかった”、“普段どおりの暮らし・仕事をしていた”などであった。都会

に暮らすわれわれがコロナで大騒ぎし移動制限に四苦八苦しているなかにあっても、山村の人々は日々の暮らしをあまり変わることなく送っていたようだ。

また、林業（木材生産）に関しては、コロナ禍における「ウッド・ショック」なるもので一時、材価があがったものの（一部の地域で）、その後はコロナ前に戻ってしまった、という声も多々聞かれた。コロナ禍においても、山村ではいつものように木材生産が行われ一農村で農業生産が行われるように一生計をたてていた。そして、「ウッド・ショック」なる現象によって一時的な材価の高騰を引き起こし、地域によって差はあったようだが、原木価格もそれなりに上がった。ただそれも、コロナの収束とともに材価は下がりはじめ、いまではコロナ前の

価格まで戻った地域が多いようだ。この「ウッド・ショック」なるものについては、これから検証が必要だろう。

このような状況下にあっても、人々（事業体等も含めて）は木を伐って運び出し、そしてまた木を植えていたのである。

こうした山村の移ろいとともに、これはコロナ前からのことでもあるが、少しずつ山村（農村も含め）に移住してくる若い世代の人たちも出てきている。例えば、都市部から山村に移住して「森のようちえん」を主宰したり、木工品をつくる工房をひらいたり。また、移住せず

とも農山村の（若い）人々と交流しながら地域のことを学び・考えていくような活動も展

アフターコロナの山村、そして林業

開されているようだ。

そうしたなか、特にコロナ禍において広がってきたのがキャンプ（ソロキャンプ、ホームキャンプ等）ブーム（アウトドアブーム）のなかでの森林利用だ。森林（空間）を多面的に利用して、経営のなかに「フォレストアドベンチャー」や「フォレストバイク」などのアクティビティを取り入れる、あるいは、「森林」そのものを貸し出す（レンタル）「フォレント」なる取り組みもはじめられ、これは全国的に展開されている。

こうした動き・取り組みが一過性に終わることなく継続して続けられていくと、これからの山村での暮らし方もまた、新たな展開がみえてくるのではないだろうか。

(Syangri-La)